

「学際統合型専門職連携教育開発プロジェクト ー看護・福祉学生協働による地域包括支援センターを 核とした住民参加型ケアシステムをつくるー」 の一環として実施した地域包括支援センター職員研修会の成果

井出成美¹⁾ 河野由乃³⁾ 泉宗美恵¹⁾ 下村幸仁²⁾ 佐藤悦子¹⁾ 神山裕美²⁾
吉澤千登勢¹⁾ 柳田正明²⁾ 小野興子³⁾ 清水恵子¹⁾ 田中彰子¹⁾ 伊藤健次²⁾
大澤準一³⁾ 望月宗一郎¹⁾ 須田由紀¹⁾ 中橋淳子¹⁾ 森田祐代¹⁾ 山本奈央¹⁾
三井知波留³⁾ 平形満美子³⁾ 松橋昌代³⁾

要 旨

教育GP「学際統合型専門職連携教育開発プロジェクト-看護・福祉学生協働による地域包括支援センターを核とした住民参加型ケアシステムをつくる-」の一環として実施した地域包括支援センター職員研修会の成果を明らかにした。対象とした研修会は、平成21年2月～平成22年7月にかけて実施した全9回である。研修参加者から得られたアンケート結果と、研修過程でKJ法によって作成された【課題】【解決策】【成果目標】の表題の内容の分析から、研修会の目標に沿って研修の成果を考察した。

研修目標への達成感を調べたアンケート結果は9回目までに、どの目標も約8割以上が、おおむね達成できたと回答しており、自由記述結果からも、研修会により、地域の課題を明確にし、方向性や具体的な方策を立て業務に反映させることが出来たことが伺える。本研修は大学の地域貢献としての意義も高く、専門職連携教育の質を高める上でも、継続の必要性が示唆された。

キーワード：大学の地域貢献 地域包括支援センター 現任教育 専門職連携 専門職連携教育

I はじめに

平成20年度文部科学省の「質の高い大学教育推進プログラム（教育GP）」として、山梨県立大学の「学際統合型専門職連携教育開発プロジェクトー看護・福祉学生協働による地域包括支援センターを核とした住民参加型ケアシステムをつくるー」（以下「本プロジェクト」と略す）が採択された。

本プロジェクトが採択された理由のひとつとして、学生が地域住民の生活の場に入り、住民と共にケアシステムをつくる地域支援体制を整備・構築することについて、社会貢献という観点から大きな意義を有することが挙げられている¹⁾。

本プロジェクトは、人間福祉学部と看護学部の協働による専門職連携教育プログラムの開発をめざしており、各学部が養成する専門職が配置され機能している地域包括支援センターを演習フィールドとしている。地域包括支援センターは、2005年の介護保険法改正によって、高齢者のニーズや状態の変化に応じて必要なサービスが切れ目なく提供される「包括的かつ継続的なサービス体制」を確立させていく役割を担う機関として創設された²⁾。保健師、主任ケアマネージャー、社会福祉士を置くことになっており、福祉分野、看護分野の専門職の効果的な協働が不可欠な実践の場のひとつである。本プロジェクトの演習の受け入れ先となる地域

（所 属）

1) 山梨県立大学看護学部

2) 山梨県立大学人間福祉学部

3) 山梨県立大学教育GP

包括支援センターの職員にとって、演習への協力は、地域の課題やその解決策について検討し地域ケアシステムを構築していくプロセスになり、力量形成に役立つという期待が、大学側・地域側（専門職連携教育の演習フィールドとなるA市）の担当者双方に存在した。そうした経過から、本プロジェクトの一環として、A市と大学による協働の地域包括支援センター職員研修会（以下、本研修会と略す）が計画・実施された。

本研修会は、山梨県立大学の教育理念である地域に開かれた地域と向き合う大学のあり方に貢献するものであり、大学の知的資源を地域に開放し、地域社会の発展に役立つものであると考える。したがって、本研修会の成果を明らかにすることは、大学の地域貢献の実践を評価することにつながり、必要かつ有意義であると考ええる。

本研修会は、平成21年2月～平成22年7月にかけて、これまで合計9回実施してきている。第1回～6回までの研修会については、既にその成果と課題についてまとめ、学会発表を行っている³⁾。

本報告では、こうした課題への対策を盛り込んで、その後に実施した第7回～9回の研修会を含めて改めてその成果を評価したので報告する。

II 目的

山梨県立大学における教育GP「学際統合型専門職連携教育開発プロジェクトー看護・福祉学生協働による地域包括支援センターを核とした住民参加型ケアシステムをつくるー」の一環として実施した地域包括支援センター職員研修会の成果を評価する。

III 地域包括支援センター職員研修会の概要

1. 本研修会実施までの経過

本研修会に先駆けては、本プロジェクトの演習フィールドであるA市と協議を持った。その中で地域包括支援センター（以下、包括と略

す）職員が地域のニーズの把握や地域包括ケア体制の整備について課題を持っていることが明らかになった。そこで大学とA市で協働し、包括職員のスキルアップのための研修会を持つことになった。本研修会は、大学が包括職員に対し一方的に研修を施すというものではなく、包括職員、A市介護保険担当職員（以下、市職員と略す）、大学教員各々が、同等の立場でそれぞれの業務上の課題を明確にして解決のための方向性を見出す過程を共に踏むことを重要視した。そのため、包括職員だけでなく、市職員や大学教員も、同じ研修に臨み、それぞれの所属での課題と解決策の明確化に取り組むことにした。

2. 本研修会の概要

研修会の概要を表1に示した。表中に示したように4つの目標に向けて、段階的に研修を計画した。研修段階1は【課題明確化】をテーマにしており、目標1を目指した内容である。また研修段階2は【課題解決に向けた解決策の検討】をテーマにしており、目標2,3を目指した内容である。目標4は、研修全体を通してKJ法による共同作業によってその達成を目指した。

研修段階2までが終了したところで4つの目標を目指したプログラムが一段落するため、この時点で目標達成のためのアンケートを実施し評価した。その結果、包括職員間の業務に関する認識の共通理解が進んだことが成果として挙げられる一方、業務の具体的な方策の検討への達成感が十分でないことが課題として挙げられた⁴⁾。つまり目標3の達成状況が不十分であることが示唆されたので、さらに研修会を継続させ、具体的な解決策の実践プロセスを検証し実践の成果を確認すると共に、更なる課題に対する戦略が立てられるような研修会を企画して実施したのが、第7～9回の研修会である。

3. アンケートの実施

表1中に示したように、本研修会では、研修の目標達成の評価を行うことと、研修内容や研修方法への意見を聞き研修にフィードバック

表1 地域包括支援センター職員研修会の概要

研修目的	地域包括支援センター職員が、地域の課題をより具体的に明らかにすることによって、地域包括ケア体制の方向性や対策を検討し、今後、高齢者がいきいきと暮らせる地域づくりの実践につなげることが出来る	
研修目標	1 地域の課題を分析し明らかにする 2 課題解決に向けての方向性が明確になる 3 具体的な方策を検討し業務につなげることが出来る 4 共同作業を進めるプロセスにより参加者の共通理解を深めることができる	
研修対象	A市包括職員、A市介護保険担当課職員、教育GP担当教員 (A市：人口20万人弱 高齢化率約22% 委託型の地域包括支援センターが10箇所あり、市の介護保険担当課は介護情報センターの機能をもち包括の業務を統括している)	
研修方法	KJ法によるグループ演習 KJ法の講師を助言者に呼んで指導を受けた 各回の研修テーマに沿って、グループワークを実施した	
研修内容		
研修段階1 第1～3回	研修時期	平成21年2月～5月
	研修テーマ	【課題明確化】 各所属の業務上の課題を職員間で協働して明らかにする
	グループワーク	所属ごとにグループをつくり、下記の問いに対する個々の考えを付箋に記入し、KJ法を用いてカード化、分類、統合、構造化の作業を行う ●包括職員：包括の日常活動での地域へのかかわりについて抱えている悩み、問題は何か。 ●A市介護保険担当課職員：市介護支援情報センターの抱えている悩み、問題は何か。 ●大学教員：専門職連携演習を終えて抱えている悩み、問題は何か。
	評価のためのアンケート	第2回と第3回の研修後に、研修への意見や感想について自由記述で回答を求めるアンケートを実施した。
研修段階2 第4～6回	研修時期	平成21年5月～7月
	研修テーマ	【課題解決に向けた解決策の検討】 明らかになった課題の解決に向けた方策を検討する
	グループワーク	所属ごとにグループをつくり、下記の問いに対する個々の考えを付箋に記入し、KJ法を用いてカード化、分類、統合、構造化の作業を行う ●包括職員：包括の日常活動での地域へのかかわりについて抱えている悩み、問題点の解決策は何か。 ●A市介護保険担当課職員：市介護支援情報センターの抱えている悩み、問題の解決策は何か。 ●大学教員：専門職連携演習を終えて抱えている悩み、問題の解決策は何か。
	評価のためのアンケート	第5回の研修後に、研修への意見や感想について自由記述で回答を求めるアンケートを実施した。 第6回の研修後に、第1回～6回までを通じての目標達成を評価するための5段階選択肢質問と自由記述によるアンケートを実施した。
研修段階3 第7～9回	研修時期	平成22年2月～7月
	研修テーマ	【解決策実践の検証と戦略の明確化】 明らかになった解決策の実践プロセスを検証し、さらなる戦略（課題・具体策・成果目標）を明確にする
	グループワーク	7,8回：所属ごとにグループをつくり、実践プロセスを撮影した写真を材料にKJ法によってカード化、分類、統合、構造化の作業を行う ●包括職員：包括の日常活動での地域へのかかわりについて解決策実施の過程と結果の検証 ●A市介護支援情報センター職員：市介護支援情報センターの抱えている悩み、問題の解決策実施の過程の検証 ●大学教員：専門職連携演習を終えて抱えている悩み、問題の解決策実施の過程の検証 9回：各所属ごとにグループをつくり、重点課題、成果目標、具体策を話し合い戦略フォームを作成する。
	評価のためのアンケート	第7～9回の研修後に、目標達成を評価するための5段階選択肢質問と自由記述によるアンケートを実施した。

させることを目的にアンケートを実施した。
実施したアンケート内容は、表2のとおりである。

研修の成果を評価するアンケートとは別に、研修方法や内容の改善への意見を問うための自由記述式アンケートを適宜行った。

第6回に実施したアンケートの結果から、上記2.に述べたように目標3に関連した業務の具体的な方策の検討への達成感が十分でないことが分かったため、第7回～9回の研修会を継続した。そのため第7回以降は、目標3に関連した5段階選択肢によるアンケートを実施し、第

表2 地域包括支援センター職員研修会アンケート内容

アンケート 目的	実施回	アンケート内容	回答方法
研修会の 目標達成評価	第6回	目標1について ・地域の課題を分析し明らかにすることが出来たか 目標2について ・課題解決にむけての方向性が明らかになったか 目標3について ・具体的な方策は業務につなげることが出来そうか 目標4に関して ・共同作業を進めるプロセスにより参加者の共通理解を深められたか	とてもよくできた・ややできた・どちらともいえない・あまりできなかった・まったくできなかった (問いによる表現の違いあり) の5段階選択肢による回答
	第7回	目標3に関して ・前回研修会で検討した方策を実践出来た	
	第8回	目標3に関して ・研修会での成果を今後の業務につなげられそうか	
	第9回	目標3に関して ・活動の重点課題と目標設定・具体的戦略整理についての達成感はどうか 目標4に関して ・これまでの研修会によって専門職間の理解や協働がすすんだか	
研修会の内容、方法への意見をきく	第2回 第3回 第5回 第6回 第7回 第8回 第9回	この研修会への要望・意見・感想など	自由記述で回答を求めた

9回には目標4に関連した問いも加えて解答を求めた。

IV 研修会の成果の評価方法

本研修会の包括職員への成果の評価は、アンケートからの評価と、グループワークで導かれた【課題】【解決策】【成果目標】の内容の分析の2つの方法で行った。

1. 実施したアンケートからの評価

1) 分析対象

第1回から9回の研修会に参加した10カ所の包括職員を分析対象とした。研修会の参加対象は、包括職員、市職員、大学教員であるが、本報告においては、特に包括職員への研修会の成果に絞って評価するため、分析対象を包括職員のみとした。包括職員の研修参加者数とアンケート回収状況は表3のとおりであった。各回20名から34名の参加があり、アンケート回収率は、69.0%～100%であった。

表3 地域包括支援センター職員研修会の包括職員参加人数とアンケート回収状況

研修会	参加人数 (包括職員)	アンケート 回収	回収率
1回	30名	—	—
2回	28	27	96.4%
3回	29	20	69.0%
4回	30	—	—
5回	29	25	86.2%
6回	31	26	83.9%
7回	31	29	93.5%
8回	34	34	100%
9回	35	32	91.4%

2) 研修目標に沿って作成した5段階選択肢質問への回答結果からの評価

表2のアンケート内容のうち、研修会の目標達成の評価を目的に行った8つの問いへの回答の結果から研修の目標の達成状況を評価した。

3) 自由記述内容の分析

アンケートの自由記述部分は、研修会への意見を幅広く問う目的で実施したが、記述の中に目標達成に関わる記述も存在したため、評価の対象とした。自由記述から研修会の目標に関わ

る記述を抽出し、意味内容を端的に表す表題をつけてコード化し、各目標ごとに意味内容の類似性によって分類した。その内容から、各目標について、対象者がどのような認識を持っているかを分析、考察した。

2. KJ法によって導かれた【課題】【解決策】【成果目標】の内容の分析

3段階の研修テーマごとに、それぞれグループワークによってKJ法で導き出された【課題】【解決策】【成果目標】の表題について、意味内容の類似性によって分類した。【課題】の内容からは目標1「地域の課題を分析し明らかにする」の達成状況を、【解決策】の内容からは目標2「課題解決に向けての方向性が明確になる」の達成状況を、【成果目標】からは目標3「具体的な解決策を検討し、業務につなげることができる」の達成状況を分析した。

V 倫理的配慮

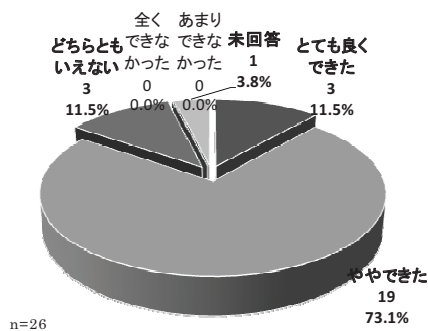


図1 地域の課題を分析し明らかにすることができるか(第6回研修後実施) 回答数 26名

各研修会にて、研修会担当の大学教員が、アンケートの目的(表2に示す)、アンケートの記載や提出は自由意志であることを口頭で説明し協力を求めた。アンケートの提出をもって同意とみなした。無記名のアンケートであることや、対象者にとってアンケート提出により研修内容の改善というメリットが生じること、研修会自体が大学とA市及び包括との合同事業であり、事業評価は必要不可欠なもので、そのためのアンケートをとることについて、倫理的な問題は本来生じないと考え、文書での説明や同意は必要ないと判断した。

VI 結果

1. アンケートの回答結果

1) 研修目標に沿って作成した5段階選択肢質問への回答結果

研修会の目標達成の評価を目的に行った8つの問いへの回答の結果を図1～8に示した。

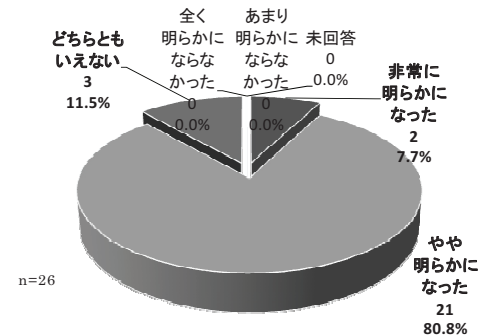


図2 課題の解決に向けての方向性が明らかになったか(第6回研修後実施)回答数 26名

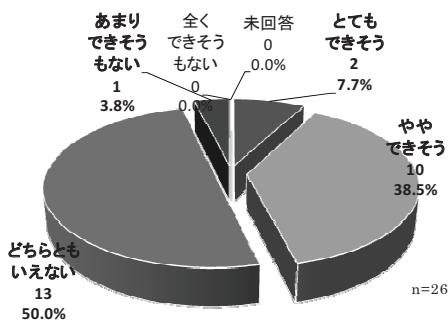


図3 具体的な方策は業務につなげることができるか(第6回研修後実施) 回答数 26名

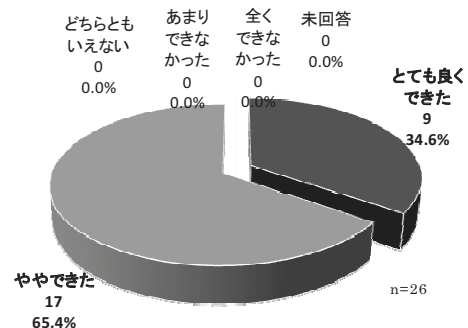


図4 共同作業を進めるプロセスにより参加者の共通理解を深めることができたか(第6回研修後実施) 回答数 26名

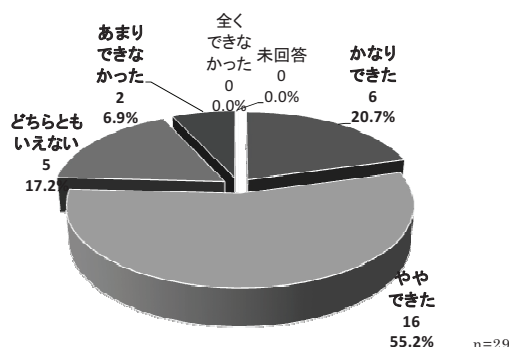


図5 方策を実践する活動ができましたか（第7回研修後実施） 回答者数 29 名

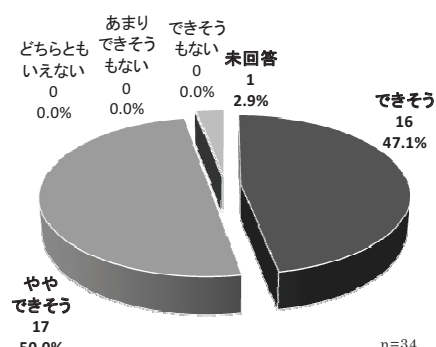


図6 研修会での成果を今後の業務につなげることができそうですか（第8回研修後実施） 回答者数 34 名

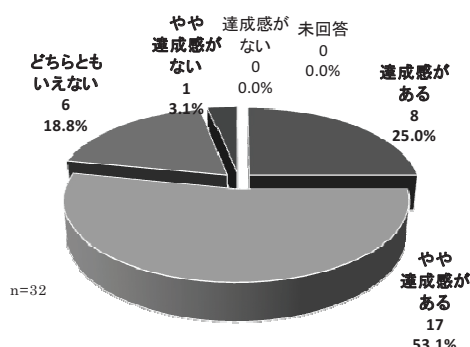


図7 活動の重点課題と目標設定・具体的戦略整理についての達成感（第9回研修後実施） 回答者数 32 名

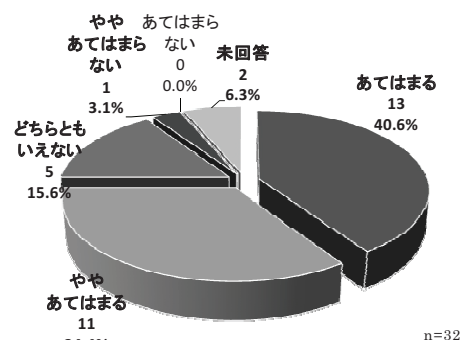


図8 専門職間の理解や協働がすすんだか（第9回研修後実施） 回答者数 32 名

(1)目標1を評価する問いへの回答結果

図1に示したように、第6回までの研修によって、「地域の課題を明らかにすることができたか」という問いに対し、84.6%の者が「とてもよくできた」あるいは「ややできた」と回答していた。

(2)目標2を評価する問いへの回答結果

図2に示したように、第6回までの研修によって、「課題の解決に向けての方向性が明らかになったか」という問いに対し、88.5%の者が「非常に明らかになった」「やや明らかになった」と回答していた。

(3)目標3を評価する問いへの回答結果

図3に示したように「具体的な解決策は業務につなげることができそうか」という問いに対し、第6回研修後の回答では、「とてもできそう」「ややできそう」と回答した者は、合わせて46.2%にとどまっているが、図5に示したように、第7回研修後の、「方策を実践する活動が出来ましたか」という問いに

し、「かなりできた」「ややできた」と回答した者は合わせて75.9%、第8回研修後では、図6に示したように、「研修会での成果を今後の業務につなげること出来そうですか」という問いに、「できそう」「ややできそう」と回答した者は合わせて97.1%にのぼっている。また、図7に示したように、第9回研修実施後の、活動の重点課題と目標設定・具体的戦略整理についての達成感について、「達成感がある」「やや達成感がある」と回答した者は合計78.1%であった。

(4)目標4を評価する問いへの回答結果

図4に示すように、第6回研修会終了時、共同作業を進めるプロセスにより参加者の共通理解を深めることができたかという問いに対し、100%の者が、「とてもよくできた」「よくできた」と回答した。また、図8に示すように、専門職間での理解や協働がすすんだかという問いに対し、「あてはまる」「ややあてはまる」と回答した者は合わせて75%であっ

た。

2) 自由記述内容の研修目標ごとの分類結果

(1)目標1「地域の課題を分析し明らかにする」

に関する記述

自由記述から、目標1に関した記述内容を抽出し、研修の段階ごとに、意味内容の類似性によって分類した結果を表4に示した。

研修段階1の目標1に関する記述は、「KJ法により課題が次第に明らかになり、楽しく取り組める」「担当地域の特性が見えてきて気づきや学びが多く仕事に活かそう」「普段できない業務の振り返りが出来、新しい発見があり、有意義である」の3項目に分類できた。

表4 目標1「地域の課題を分析し明らかにする」に関する記述

研修段階	分類項目	コード
研修段階1 第1～3回 研修テーマ 【課題明確化】	KJ法により課題が次第に明らかになり、楽しく取り組める	課題が明らかになり今後は楽しみ
		細かい作業だが問題がはっきりしつつある
		グループワークにより課題が整理された
		KJ法によって包括の持つ課題が浮かび上がった
		課題も明確になりKJ法の楽しさも分かった
	担当地域の特性が見えてきて気づきや学びが多く仕事に活かそう	地域のことが少しづつ見えてきた
		地域の特性がわかって楽しい
		地域の特性が見えてきて仕事に活かせる
		高齢者に住みやすい穏やかな地域づくりが必要であるが見えてきた
		地域が見えてきた
		表面化していなかった地域の特性や問題点が見えて学びが大きかった
	普段できない業務の振り返りが出来、新しい発見があり、有意義である	改めて地域を知ることができ仕事に活かしていける
		日頃できない業務の振り返りができてよかった
		意識して考えることができなかったことが見えて刺激となった
		業務を振り返り自分自身の問題が分かった
		適度に緊張しながら参加し業務を見直すきっかけとなっている
		業務につながる研修で充実している
		新しい発見があり楽しい研修
研修段階2 第4～6回 研修テーマ 【課題解決に向けた 解決策の検討】	問題や課題が図式化され目に見える形となり解決策に結びつけることが出来た	予想以上に楽しくさまざまな発見があった
		普段感じていた問題が整理され課題としてはっきりとした
		問題点が見えてきた
		課題が目に見える形となった。思考を視覚化することの大切さを再認識した
		地域がより明確に見え課題がはっきりした
		課題が見えてきた
		自分たちの課題が明らかになった
		自分たちの課題が図式化された
		問題点の再確認ができた
		作業の中で問題や解決策が明確になった。
		課題が明確になった
研修段階3 第7～9回 研修テーマ 【解決策実践の検証 と戦略の明確化】	他の包括の発表を聞きつつ所属包括の課題が明らかになった	KJ法によって問題点がみえて良かった
		課題について検討できた
	課題がはっきりし今後の活動に活かすことが出来る	各包括の課題が明確になり目標が定まりやすくなった
		他の包括の発表を聞き課題がよりはっきりとした
		日々の業務で気付けない課題に気付く機会だった
		課題が分かり今後の仕事に活かそう
		課題を見出す一方法として意義があった
		課題が見えたので来年度の活動に活かせる
		課題が見え今後に期待できる
	包括職員間で課題の再認識と共有が出来た	実践の確認ができ課題を整理できた
		不足している活動を客観的に分析できた
		課題解決に向け考えることができた
		課題を包括内の職員間で再認識できた
		職員間で共通認識を深め業務に取り組みたい

研修段階2の目標1に関する記述は、「問題や課題が図式化され目に見える形となり解決策に結びつけることが出来た」の1項目に集約できた。

研修段階3の目標1に関する記述は、「他の包括の発表を聞きつつ所属包括の課題が明らかになった」「課題がはっきりし今後の活動に活かすことが出来る」「包括職員間で課

題の再認識と共有が出来た」の3項目に分類できた。

(2)目標2「課題解決に向けての方向性が明確になる」に関する記述

自由記述から、目標2に関した記載内容を抽出し、研修の段階ごとに意味内容の類似性によって分類した結果を表5に示した。

研修段階1では、目標2に関する記述はな

表5 目標2「課題解決に向けての方向性が明確になる」に関する記述

研修段階	カテゴリー	コード
研修段階1 第1～3回 研修テーマ 【課題明確化】		
研修段階2 第4～6回 研修テーマ 【課題解決に向けた 解決策の検討】	すべきこと、解決策 が明確になった	行動すべき課題が見えた気になった
		包括職員で導いた地域の課題から解決策がみえてきてすっきりした
		地道に地域住民に働きかけることが大切と実感した
		出来ることを検討する機会が持てた
		職員同士で解決策を具体化できた
		今後の業務や方向性が見えて楽になった
		KJ法によって解決策が見えてよかった
研修段階3 第7～9回 研修テーマ 【解決策実践の検証 と戦略の明確化】	参加者が少なく内容が 深まらなかった	所属包括からの参加人数が少なく深まらなかった
	日々の業務の整理が出来た	業務内容の整理ができ達成感があった
		包括職員間で日々の業務の整理が共に出来た
	今後の業務ですべきことが分かった	今後すべき仕事が増えた
		地域組織を活かしてネットワークを構築するという業務の振り返りが出来た
		今後の活動について新しい発見があった
	地域の課題を意識しながら業務に取り組む姿勢が持てた	何をすべきか分かってよかった
		課題を認識して業務に取り組む機会となった
		課題を持って業務に取り組む姿勢が足りないことがわかった
		地域の課題と包括の役割について改めて考える機会となった
	他包括の活動を聞き、視野を広げることが出来た	自分の地域を広い視野で見え改めて社会資源に気付けた
		他包括の活動を参考に今後に活かしたい
	目標を持って活動するという意識の重要性に気付けた	他の包括の活動を聞き業務の振り返りができた
		目標を持つという意識が欠けていたと気付けた
		まだ理解が不十分だが目的が見えた
		満足のいく目標設定が出来なかった
		現実可能な目標ラインになった

かった。

研修段階2では、「すべきこと、解決策が明確になった」「参加者が少なく内容が深まらなかった」の2項目に分類できた。

研修段階3では、「日々の業務の整理が出来た」「今後の業務ですべきことが分かった」「地域の課題を意識しながら業務に取り組む姿勢が持てた」「他包括の活動を聞き、視野を広げることが出来た」「目標を持って活動するという意識の重要性に気付けた」の5項目に分類できた。

(3)目標3「具体的な解決策を検討し、業務に

つなげることができる」に関する記述

自由記述から、目標3に関した記述内容を抽出し、研修の段階別に意味内容の類似性によって分類した結果を表6に示した。

研修段階1では目標3に関する記述はなかった。

研修段階2では、「方策を具体化して実践していきたい」の1項目に集約できた。

研修段階3では、「地域に出向くことが楽しくなり効果が見えてきた」「反省点を活かして来年度に向けてがんばりたい」「活動が可視化でき達成感がある」「他包括の活動を自

表6 目標3「具体的な方策を検討し業務に繋げることができる」に関する記述

研修段階	分類項目	コード
研修段階1 第1～3回 研修テーマ 【課題明確化】		
研修段階2 第4～6回 研修テーマ 【課題解決に向けた 解決策の検討】	方策を具体化して実践 していきたい	具体的なことのほうが実践につながる 実践できればと思う 今後の実態把握や活動に活かしたい 実行してみて結果が楽しみ
研修段階3 第7～9回 研修テーマ 【解決策実践の検証 と戦略の明確化】	地域に出向くことが楽 しくなり効果が見えて きた	地域に出向くきっかけになった 地域に出向くのが楽しくなった 地域に出向く効果が見えてきた
		思い通りの活動ができなかったという反省を来年度の活動に活かしたい 業務を振り返れたので来年の活動計画に活かしたい
		できることをひとつずつ皆で検討して実践していきたい 問題点が把握できたので来年度の活動に活かしたい 世代間交流をし高齢者の生活を支えるネットワークづくりをしたい 実践に結び付けられるよう詰めていきたい
	活動が可視化でき達成 感がある	活動の様子がよくわかった 今までの活動が可視化でき達成感があった 実践を反映した結果になったか疑問だが楽しくできた 包括の活動の様子がよくわかった
		他の包括のよい活動を自分の包括でも取り入れ体制整備をしたい
		具体的な方策を挙げることが重要である
	他包括の活動を自分の 包括にも活かしたい	具体的な戦略を考えるにあたり新しい発想の具体策を挙げることに苦勞した
		具体的な行動が取れやすくなった

分の包括にも活かしたい」「具体的な方策を
挙げることが重要である」の5項目に分類で
きた。

(4) 目標4「共同作業を進めるプロセスにより
参加者の共通理解を深めることができる」
に関する記述

自由記述から、目標4に関した記述内容を
抽出し、研修の段階別に意味内容の類似性
によって分類した結果を表7に示した。

研修段階1では、「他包括の現状や課題が
知れてよかった」「他包括との共通の課題や
それぞれの特徴が分かりよかった」「他包括
職員との意見交換がよかった」「グループワ
ークは楽しい」「職員同士気持ちを分かち合
い一体感が生まれた」「意見交換で新たな発
見が出来た」「回によってメンバー構成が
変わり深められなかった」の7項目に分類
できた。

研修段階2では、「職員の考えや意見を知
ることが出来、気づきがあった」「参加者
との交流が図れて関係が密になった」「職
員同士共に考え話し合えた」「職員同士の
考えを共有できた」「参加人数が少ないと
達成感が

薄い」の5項目に分類できた。

研修段階3では、「他の包括の活動の様
子を確認できてよかった」「職員同士協働
して活動する機会となった」「各専門職か
らの意見や発想が乏しかった」の3項目
に分類できた。

2. KJ法によって導かれた【課題】【解決策】【成
果目標】の内容結果

1) 【課題明確化】の段階で明らかになった課題
第1～3回【課題明確化】の研修におけるグ
ループワークで、合計46の課題に関する表
題が挙がった。これらの表題を意味の類似
性によって分類したところ、『地域包括支
援センターの認知度・理解度が低い』『地
域の実態把握不足と関わり方の未整備』『
関係者・関係組織間での方針の共有や意
思の確認が不十分』『対象者の高齢化と地
域での孤立化』『支援の目から漏れてしま
う人たちの存在』『多問題の事例への対応
に苦慮』『活動の評価が不十分で達成感
がない』『生活基盤の不便さが問題を増幅
』『介護予防事業への関心や参加が少な
い』『マンパワー不足による負担大』『地
域の組織力や人力

表7 目標4「共同作業を進めるプロセスにより参加者の共通理解を深めることができる」に関する記述

研修段階	分類項目	コード
研修段階1 第1～3回 研修テーマ 【課題明確化】	他包括の現状や課題が 知れてよかった	他の包括の現状が理解でき今後が楽しみ
		他の包括の抱える問題を聞く機会が持て勉強になった
		各包括の問題が聞けてよかった
		日常業務の中で感じることを共有化でき、他の包括の課題の共有もできた
	他包括との共通の課題 やそれぞれの特徴が分 かりよかった	他の包括の状況が参考になった
		他の包括と共通した課題については解決策を共に考える機会があるとよい
		他の包括と共通の悩みが明らかになり面白かった
		他包括の発表を聞き共通部分や違う部分があり興味深かった
	他包括職員との意見交 換がよかった	他の包括の職員との意見交換は参考になる
		他の包括と意見交換ができてよかった
	グループワークは楽しい	同じ職場のものと同様に作業でき楽しかった
		他のスタッフの考えが見えてきてグループワークは楽しい
研修段階2 第4～6回 研修テーマ 【課題解決に向けた 解決策の検討】	職員同士の気持ちや意 見を分かち合えて一 体感が生まれた	グループワークにより職員間の一体感が生まれた
		話し合いの中で悩みやストレスの解消もできた
		地域を知ることに関してスタッフの前向きな気持ちが見えてよかった
		職員間での問題の共有や共通理解が図れた
		日ごろの業務の中では分からないことも意見交換で発見できてよかった
		意見が多く出て新しい発見があった
		業務に追われ意識してこなかったことが見えてきた
		回によってメンバー構 成が変わり深められな かった
	参加者との交流が図れ 関係が密になった	研修の初回と2回目でメンバー構成に違いがあり意見の方向性がみえなくな った
		他のスタッフが抱えている課題も分かり方策検討の中で勉強になった
		自分では思いつかない発想もあり有意義であったが知識不足も感じた
		お互いの考えを比較分析できたのもよかった
		意見を出し合うことで気付くことが多かった
		メンバーの考えを知ることができてよかった
		意見交換、交流ができたので良かった
		たくさんの意見が聞けてよかった
	職員同士共に考え話し 合えた	メンバーの思い、スタンスなど知る機会となった
		日常業務が整理でき他の包括とも交流が図れた
		皆の思いがわかりより深く理解しあえた
		他の包括職員とコミュニケーションが図れた
		他の包括の地域のことを知ることができた
		グループでの関係も密となり楽しくできた
		普段できない話もでき充実していた
		職員間で課題を考えそれに対する解決策も具体化できてよかった
研修段階3 第7～9回 研修テーマ 【解決策実践の検証 と戦略の明確化】	他包括の活動の様子 を確認できてよかった	職員同士で同じ課題をもち、解決に向けて話し合いができた
		他のメンバーと意見交換できたことがとてもよかった
		メンバーの考えを共有でき整理できてよかった
		改めて地域のことを話し合うことができて共有できた
		情報、状況の共有ができた
		似た問題を感じていたり、それに対する共通理解ができた点良かった
		もっと参加人数が多かったら検討が深められた
		メンバーが少ないとグループワークがづらい
	職員同士協働して活動 する機会となった	包括同士の活動内容を、改めて知ることができるのが楽しみ
		他包括の課題知ることが出来、自身の包括にも役立つアイデアを獲得出 来た
		他の包括の活動の様子を知ることができ良かった
		他包括の取り組みが共有でき住みやすい町づくりに発展させられると思っ た
		1年間の皆の努力が見えた
		他包括の地域への取り組みを知ることが出来て良かった
		他の地域の様子を知る機会になった
		各包括が同じ悩みを持ちながらもがんばっている様子がわかった
	各専門職からの意見や 発想が乏しかった	他包括の活動状況を知ることが出来非常に良かった
		職種をこえて何かをすることの必要性を感じている
		職員同士、有効な話し合いができた
		時間をとって皆で話をする機会が今後の私たちの活動につながった
		日頃の業務の中で話しあう機会が少ないため良い機会となった
		今後の戦略についてみんなで話ができて良かった
		協働できチームとして取り組めた
		3人そろってひとつのことを考える機会を得られて良かった
		各々の考えが伝わってよかった
		普段から話しあいが持てているがより理解が深まった
		各々の専門職の立場からの意見や発想は出なかったように感じた

を活かした活動が出来ていない』の11項目に分類された。

2)【課題解決に向けた解決策の検討】の段階で明らかにになった解決策

第4～6回【課題解決に向けた解決策の検討】の研修におけるグループワークで、合計45の解決策が挙げられた。これらの解決策を意味の類似性によって分類したところ、『地域に出て当事者、関係者や関係団体をよく知りつなかりをつくる』『包括の名称、業務内容、啓蒙情報の周知を図る』『組織内と各支援組織との横の連携を図る』『地域住民や高齢者自らが取り組む活動の場づくりと支援を行う』『組織内および関係者の能力向上を図る』の5項目に分類できた。

3)【解決策実践の検証と戦略の明確化】の段階で検討した成果目標

第7～9回【解決策実践の検証と戦略の明確化】の研修におけるグループワークで、合計80の成果目標が挙げられた。これらの成果目標を意味の類似性によって分類したところ、『住民、関係機関からの相談や連絡が増える』『住民に身近な場での相談や教室の開催機会が増える』『地区組織や事業所間の交流やネットワークが広がる』『機関誌を置く場所を開拓し若年から高齢まで幅広い年齢層に包括のPRを行う』『地域から得られた情報を効果的に整理・分析する』『支援を必要とする人々をサポートする住民ボランティアが増えその活動が活発になる』『包括職員の健康が保て満足感や達成感が得られる』『担当者間で情報や方針の共有が出来る』の8項目に分類できた。これらの具体的な記述には、「○%増える」「○回実施する」など具体的な数値目標が表記されていたり、活動のターゲットも具体的に名前が挙がっていたりするものが多かった。

Ⅶ 考察

1. 研修会の目標達成状況

1)目標1「地域の課題を分析し明らかにする」

図1に示すように地域の課題を分析し明らか

にできたことへの達成感は高く、結果1.2)-(1)に示したように、どの研修段階でも課題の明確化についての自由記述があり、地域特性が明確になってきたことや、所属包括職員間で明らかになった課題を共有できたことへの意義を感じていることが伺われる。普段の業務の中ではなかなか職員間で話し合う機会が持てないという記述もあり、職員間で課題が共有できたことが、解決策や活動の成果目標をより具体的に検討することにつながっている。

明らかにになった課題の内容を見ると、結果2.1)に示すように、『対象者の高齢化と地域での孤立化』などの支援対象者側の問題や地域特性が明確になってきたと共に、『地域の組織力や人力を活かした活動が出来ていない』などの包括職員としての活動上の課題も明確になっている。

2)目標2「課題解決に向けての方向性が明確になる」

図2に示すように、研修参加者の88.5%の者が課題解決への方向性の明確化への達成感が高いと考える

また、結果1.2)-(2)に示したように、すべきこと、出来ることが具体的に見えてきたという記述や、他の包括の活動を知る事によって新しい発見があり、今後の業務に活かそうであるという記述がみられることから、解決の方向性のある程度明確に出来たと考えられる。一方で、参加人数が少なく深まらなかったという記述や目標設定について現実的に達成可能な低いラインに設定してしまうなどの記述もあり、グループ構成やグループワーク支援に関して、検討が必要であることが示唆された。

結果2.2)に示すように、明らかにになった解決策の内容を見ると、とにかく地域に出て対象者や関係者の状況を把握することや、様々な人や組織をつなげていくこと、住民や自らを含め各関係者の能力の向上に務めることなど、課題が明らかにになったことに呼応して具体的でかつ直接的な解決策を見出すことができていていると考える。

3)目標3「具体的な方策を検討し業務につなげることが出来る」

結果1.1)-(3)に示したように、方策を業務につなげることにについて、第6回研修終了時、第7回終了時、第8回研修時と達成感は上昇している。第7,8回に実践のプロセスを確認する内容を入れたことが、効果的だったと考える。しかし、図7に示したように第9回で重点課題・目標設定・具体的戦略の整理の達成感は、第8回終了時の結果に比べて低くなっており、今後具体的戦略による実践のプロセスについても、研修会にて確認していく内容を計画していく必要があると考える。

結果1.2)-(3)に示したように、自由記述には、実際に地域に向かう活動が多くなっていることを実感している記述、実践が進んでいることを可視化できたという記述があり、実践の過程を皆で検証しあひ他の包括と共有する場を研修会で持てたことによる職員の自信や実践への意欲の向上が伺われる。

結果2.3)に示したように、導き出された成果目標の内容をみると、地域との密着した活動を具体的に行動に移せるような成果目標が掲げられ、数値目標も設定でき、今後の活動への実行可能な目標となっている。

4)目標4「共同作業を進めるプロセスにより参加者の共通理解を深めることが出来る」

結果1.1)-(4)に示すように、共同作業を行った包括職員間の共通理解への達成感が高いが、専門職間の理解や協働への達成感是十分とは言えない。本研修は、専門職連携教育プロジェクトの一環として実施しているものでもある。専門職連携教育の推進と、地域での専門職連携の推進は双方が効果的に回転することで着実な歩みをもたらすと指摘されている⁵⁾。したがって今後さらに、研修会だけでなく専門職連携教育の演習を通じて、具体的に専門職間の共通理解を促進させるような工夫が必要であると考え

る。結果1.2)-(4)に示したように、自由記述では、職員間の一体感や、悩みや気持ちの共有が出来

たとの記述があった。他の職員の抱える課題を共有し整理できたこと、他の職員との考え方の違いを理解できた上で解決策に向けて話し合えたことに意義を感じるという記述がみられた。他の包括の活動の様子を知ることが出来、自分の所属包括に役立てたいとする記述もあり、研修の過程で、所属内だけでなく、他包括の課題や市全体の課題の共通理解も進んだことが伺われる。

5)今後の課題

本研修は、本学とA市との協議により、計画的段階的に進めてきた。これまで全9回の研修の中で、4つの研修目標についてその達成状況を検討したが、アンケート結果や、各段階で導き出された課題、解決策、成果目標の内容から、概ねその目標を達成できたと考える。しかし、課題や解決策を明らかにできても、実際の活動や業務につなげるということや、専門職間の共通理解について、達成感の不十分さが示唆された。今後も大学と地域との協働による研修の継続を望む声もあり、包括職員が、自信を持って実践を行っていきけるような、継続的な支援となりうる内容や、専門職間の連携や共通理解が進むような工夫を検討していく必要がある。

2. 大学の地域貢献における本研修会の意義

地域貢献は大学に求められる役割のひとつである。特に看護や福祉という専門職を養成する分野においては、質の高い人材を地域に送り出すという役割に加え、地域で働く専門職の資質向上に寄与することも重要な使命であろう。看護系大学の地域貢献のひとつの柱として、地域の医療・福祉の向上に寄与する研究と同時に、業務改善など地域の人々が必要としていることを共に行い成果を返し、その成果を活用しやすくするという貢献の仕方がある⁶⁾と指摘されている。このような意味からも、本研修会において、地域包括支援センターの業務改善や職員の資質向上に向けて、大学側の一方的な研修ではなく、業務改善の過程と成果を可視化する方法を取り入れて地域側と共に取り組んだことは、

大学の地域貢献として意義があったと考える。

本研修会は、専門職連携教育プロジェクトの一環として実施した。地域と協働した専門職連携教育のあり方として、大学には、総合的な視点と態度を併せ持った保健福祉従事者を養成することに加え、現任者への教育・研究事業にも貢献することが求められている⁷⁾。専門職連携教育と現場の専門職連携は車の両輪であり、双方の推進が双方にとって効果を上げる。本学の専門職連携教育演習は、教育GPの期間終了後も、本学教育プログラムの中に定着させていく予定であり、この教育プログラムを成功させていくためにも、包括職員研修のなんらかの継続は必要であろう。

引用文献

- 1) 平成20～22年度文部科学省「質の高い大学教育推進プログラム（教育GP）」採択 学際統合型専門職連携教育開発プロジェクト－中間報告書－,p1-2, 山梨県立大学教育GP執行部,2009.
- 2) 厚生労働省：介護保険制度改革の概要－介護保険改正と介護報酬改定.http://www.mhlw.go.jp/topics/kaigo/topics/0603/dl/data.pdf,2006.
- 3) 河野由乃、佐藤悦子、吉澤千登勢、清水恵子、須田由紀、望月宗一郎、小野興子、神山裕美、大澤準一、横山貴美子、伊藤健次、三井知波留、堀内理恵：「大学とA市との連携による地域包括支援センター職員研修会」の取り組み,p30,日本保健福祉医療連携教育学会第2回学術集会抄録集,2009.
- 4) 前掲3)
- 5) 埼玉県立大学編：IPWを学ぶ－利用者中心の保健医療福祉連携－,p212,中央法規,2009.
- 6) 新道幸恵：教員が地域貢献できるシステムづくり 青森県立保健大学の取り組み,p378-383,看護教育,47(5),2006.
- 7) 前掲5),p208-209.

Effects of Workshops for the Staff of Comprehensive Community Support Centers as Part of the “Interdisciplinary Research and Interprofessional Education Development Project” Conducted by the Faculties of Nursing and Public Welfare at Yamanashi Prefectural University

IDE Narumi, KOHNO Yoshino, IZUMUNE Mie, SHIMOMURA Yukihiro,
SATO Etsuko, KAMIYAMA Hiromi, YOSHIZAWA Chitose,
YANAGIDA Masaaki, ONO Kyoko, SHIMIZU Keiko, TANAKA Akiko,
ITO Kenji, OSAWA Junichi, MOCHIZUKI Soichiro, SUDA Yuki,
NAKAHASHI Junko, MORITA Sachiyo, YAMAMOTO Nao,
MITSUI Chiharu, HIRAKATA Mamiko, MATSUHASHI Masayo

key words: university's contribution to community, comprehensive community support center
in-service training, interprofessional work, interprofessional education